

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：43807

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13010

研究課題名（和文）在日外国人高齢者の福祉サービスアクセスの阻害要因とコミュニティの有効性の検討

研究課題名（英文）A study on the barriers to accessing welfare services and the effectiveness of ethnic communities for foreign elderly residents in Japan

研究代表者

安 瓊伊（AHN, Kyungyee）

静岡県立大学短期大学部・社会福祉学科・講師

研究者番号：00752164

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：在日コリアン高齢者は、言語の壁や健康上の問題、不安定な経済的状況、貧弱なつながり等による困難を抱えており、その困難に対処するサービスへのアクセスの阻害要因には、コミュニケーション問題による情報へのアクセス困難や不十分な相談支援体制、在日コリアン高齢者の認識と地域社会との弱いネットワークが示された。

在日コリアン高齢者が参加する数少ないエスニック・コミュニティは、共通の言語や生活習慣、文化を共有する同胞の子世代による支援を行い、高齢者にとっては気軽に母国語で話し、歌い、母国の食べ物を摂り、安らぎのなかで同胞と交流する居場所となっていて、そこに参加することが生きがいになっていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでのオールドカマー高齢者中心の研究からニューカマー高齢者に焦点をあてて行い、オールドカマーと共通する生活困難と、家族や身寄りのない単身のニューカマー外国人高齢者の困難が示され、エスニック・コミュニティも変化しつつあり、日本人とふれ合いながら共生を目指していることが明らかになった。

在留外国人は受け入れ国において言葉の壁、制度の壁、心の壁などの諸困難を抱えていて、さらに文化の違いにより地域社会の中での孤立が懸念されている。戦前から世代交代をしながら日本社会で生きている在日コリアン高齢者の研究から今後日本で暮らしている多様な外国人の高齢化に対する方策の検討に示唆が得られると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Elderly Korean residents in Japan who have lived in Japan for many years face difficulties due to language barriers, health issues, unstable economic conditions, poor connections. Factors that hinder access to services to deal with these difficulties include difficulty in accessing information due to communication problems, an inadequate consultation support system, and the perception of elderly Korean residents in Japan and weak networks with the local community.

Some elderly Korean residents in Japan participate in the activities of one of the few ethnic communities. In these communities, they receive support from the younger generation of compatriots who share their language, lifestyle, and culture. It is a place where they can speak and sing freely in their native language, eat their native food, and interact with compatriots in a relaxed atmosphere. It has become clear that for elderly Koreans living in Japan, participating in ethnic community gives meaning to their lives.

研究分野：社会福祉学

キーワード：在日コリアン高齢者 生活困難 社会福祉サービスアクセス 阻害要因 エスニック・コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本における在日外国人の高齢化の現状

グローバル化の進捗とともに日本には多くの外国人が仕事や留学などの理由で来日している。その中には、長年日本に住み続け高齢期を迎える者がいる。日本社会において高齢化率は 2017 年 1 月 1 日現在 27.4% となっていて、2025 年には 30% に達すると予想されている。在留外国人の高齢者の割合をみると、在日外国人全体において 65 歳以上高齢者は 6.7% であるのに比べて、韓国・朝鮮籍者が 24.9% (120,796 人) でもっとも高く、米国籍者が 9.1% (4,874 人)、台湾籍者が 8.3% (4,370 人) を示している。さらに、75 歳以上の後期高齢者数も韓国・朝鮮籍者が 10.6% (51,536 人) であり、在日外国人全体の 2.6% (61,836 人) と比べて高い割合を占めている。在日外国人高齢者が増えていく中、福祉のニーズを持ちながらも社会福祉サービスや支援を受けられない状況にいる高齢者も増えつつある。

(2) 在日韓国・朝鮮籍高齢者が社会福祉サービスや支援に繋がりにくい要因はまだ不明

なぜ在日外国人高齢者とそのニーズを解決するための社会福祉サービスや支援に繋がりにくいのかはまだ明らかになっていない。在日外国人の中で高齢化がもっとも進行している在日韓国・朝鮮籍高齢者(以下、在日コリアン高齢者)が日本で安心して最後まで生を全うするためには、彼らが抱えている課題を解決できるよう支援を受ける必要がある。しかし、自ら支援を求められないまたは支援を求めない高齢者が存在する。彼らが必要な支援に結び付いていない理由を把握して対応することができればより効果的に支援に結び付けられると考える。在日コリアン高齢者の社会福祉サービスへのアクセスを阻害する様々な要因を明らかにすることは重要な課題と言える。

2. 研究の目的

- ・在日外国人高齢者の中で高い割合を占めている在日コリアン高齢者の社会福祉サービスへのアクセスを阻害する要因を明らかにすることを目的とした。
- ・在日コリアン高齢者の属するコミュニティの活動への参加や支援をとおしての高齢者の生活や課題の変化と、コミュニティの機能を検討し、その阻害要因の対策案としてエスニック・コミュニティの有効性について考察することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 在日コリアン高齢者が抱えている生活上の困難と社会福祉サービスへのアクセスの阻害要因に関する調査

東京都と神奈川県に在日コリアンの密集居住地で介護サービスを提供している事業所・機関(介護サービス情報公表システムを用いて検索した居宅介護支援事業所と地域包括支援センター)に書面にて調査の趣旨を説明し、かかわっている在日コリアン高齢者の中から調査に協力可能な認知機能に障害のない 65 歳以上の在日コリアン高齢者と、彼らとかがわっている専門職の推薦を依頼した。返信のあった事業所・機関と日程を調整し、研究者が直接訪問して説明を行い、同意が得られた協力者に対して同意書を作成して在日コリアン高齢者 20 人、専門職 5 人にインタビューガイドにそって個別面接調査を行った。在日コリアン高齢者には、場合によって日本語と韓国語の両方を用いて面接調査を行った。その際に協力者の承諾を得て面接調査内容を IC レコーダーに録音した。研究期間は、2019 年 1 月～2019 年 12 月であった。

(2) エスニック・コミュニティにおける在日コリアン高齢者支援活動の有効性に関する調査

在日コリアン高齢者が多く住んでいる関東・東海・関西地域で在日コリアン高齢者向けの支援活動を行っている団体 5 ヶ所(デイサービス 4 事業所とボランティア団体 1 カ所)を対象にそれぞれ参与観察調査を行った。さらに、団体の活動に参加している 65 歳以上の在日コリアン高齢者 13 人と団体の代表や支援者 9 人に個別面接調査を実施した。参与観察を行う中で事前に各団体代表者に依頼をして推薦を受けた在日コリアン高齢者に面接調査に関して説明(研究の目的、内容、方法など)を行い、同意が得られた協力者に同意書を作成してインタビューガイドにそって面接調査を行った。参与観察調査は各団体の活動が行われている場で複数回実施し、面接調査の場合は団体の協力を得て面接の内容が漏れないプライバシー保護が確保できる場所で実施し、協力者の承諾を得て面接調査内容を IC レコーダーに録音した。研究期間は、2023 年 6 月～2024 年 3 月であった。

(3) 倫理的配慮

調査(1)と調査(2)に関しては、所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

4. 研究成果

(1) 在日コリアン高齢者が抱えている生活上の困難と社会福祉サービスへのアクセスの阻害要因に関するインタビュー調査

在日コリアン高齢者が抱えている生活上の困難

在日コリアン社会は時代の変化とともに変容してきて、今はニューカマーの高齢化が進んでいる。在日コリアン高齢者が抱えている生活上の困難として【言語の壁による困難と不安】【在留資格に関する不安と困難】【健康上の問題による困難と不安】【不安定な経済的状况による困難】【人との貧弱なつながりによる孤立】【他国に居住する外国人として抱える心理的不安と困難】が抽出された。

生活上の諸困難の軸に【言語の壁による困難と不安】があり、他の生活困難に影響を及ぼして、生活困難の基底には【他国に居住する外国人として抱える心理的不安と困難】があると考えられる。日本語の読み書きや会話ができない【言語の壁による困難と不安】は【不安定な経済的状况による困難】【健康上の問題による困難と不安】【人との貧弱なつながりによる孤立】【在留資格取得に関する不安と困難】に密に影響を及ぼし、絡み合っている。これらの困難を乗り越える手段には、【知り合いの支えと助け】【韓国人福祉関連職の相談と助け】【地域の行政・病院の助け】が抽出された。

専門職がとらえた在日コリアン高齢者の困難と支援上の困難感

在日コリアン高齢者を支援する専門職がとらえた在日コリアン高齢者の困難には、先行研究でもあげられた日本語による【意思疎通の困難】【無年金による経済的困難】【人との交流の困難】【生活文化の相違による困難】【介護サービス利用の困難】【受診時の困難】が抽出された。これらの困難への対応には【韓国語のできる通訳者や専門職の介入】【生活保護の申請】【コリアンデイサービスの利用】【同郷人との交流】【介護保険の申請】【病院との連携と付き添い】があった。そして、支援上の工夫には【韓国人の社会資源との連携】【意思疎通のための韓国語の学習】【地域に向けて支援活動の発信】があったが、支援上の困難として【日本の制度やサービスについての理解不足】【コミュニケーションの困難】【ボランティアによる支援の限界】【在日コリアン向けの事業所の不足】【在日コリアン高齢者の所在把握の困難】が抽出された。また、今後の課題として【支援を要する在日コリアン高齢者の所在把握】【関連機関や団体との連携】【支援者・場所・資金の確保】【コリアンコミュニティの立ち上げ】が抽出された。

社会福祉サービスへのアクセスの阻害要因

先述した在日コリアン高齢者当事者と実際に彼らを支援している専門職がとらえた生活上の困難と、それらの困難を解決するために取っている手段や今後の課題に関する調査結果から、在日コリアン高齢者が社会福祉サービスへアクセスすることを阻害する要因として、コミュニケーション問題による情報へのアクセス困難、不十分な相談支援体制、在日コリアン高齢者の認識と地域社会との弱いネットワークが考えられる。様々な困難を抱えている在日コリアン高齢者に向けた支援として、地域で人と交流できる場を設けて互いの文化を理解する機会を通して在日コリアン高齢者のネットワークを拡大強化していく必要があると考える。同じ言語を使い同じ文化を共有することは、他国に居住する外国人としての心理的不安を軽減し、他の困難への対応にも肯定的働きをすると考えられる。さらに、身近に在日コリアンや日本人が自主的に集える場と相談できる人の存在は相互理解と多様かつ複雑化している諸困難の軽減につながると考えられる。

(2) エスニック・コミュニティにおける在日コリアン高齢者支援活動の有効性に関する調査

先行した調査を終えた直後の2020年に入ってから新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、調査対象となる高齢者施設の参与観察及びインタビュー調査の実施が困難となったため、調査研究に大幅の遅れが生じた。繰り返される高齢者の感染や施設の一時閉鎖等で研究期間を2023年度まで延長し、予定した調査研究を遂行することができた。

在日コリアン高齢者向けの支援団体の参与観察調査

< 在日コリアン向けのデイサービス事業所（4ヶ所） >

4事業所は共通して2000年4月から施行された介護保険制度が外国人も使えるサービスであることを知り、在日コリアン二世が中心となり、親世代を支えるため立ちあげとなった。在日コリアンを対象に介護保険やサービスについて説明会を開いたり同胞ホームヘルパーを養成したりサービスを提供するための空間を改修するなどの準備をして事業所の開設に至り、3か所は設立20年を超えていた。利用者は主にオールドカマーの在日二世の朝鮮籍の人が多かったが、最近ではニューカマー高齢者も利用することになった。名前は通名を使う人が多く、本名を使う人は少なかった。利用者のなかには、日本人が利用しているデイサービスに馴染まず移ってきた人も数多い。デイサービスであるため、利用回数は週1～5回で様々である。日本で長く生きてきた在日コリアン高齢者は、日本語の読み書きはできなくても生活する上で必要な日常会話は日本語でできる。使用する主言語は日本語であり、朝鮮語の単語を混じりながら話をしてきた。職員は、日本人はわずかで、9割以上が在日コリアン（二世と三世）であり、朝鮮語が分かっていたので、在日コリアン高齢者が朝鮮語で話したときに対応が可能であった。事業所で提供される

食事は、毎日キムチや韓国風に調理された食べものが提供され、誕生会や敬老会、新年会などのイベントには、母国の伝統衣装を着て、地域の同胞や子供たちが参加し、その日に合う母国の伝統料理が出され、利用者は同胞と一緒に楽しんだ。また、余暇時間には母国の歌や遊びを楽しんだ。これらは日本人が利用するデイではできないことであり、言語的壁を抱えている在日コリアン高齢者には日本人の視線を意識せず、同じ背景を持ち、苦勞をしてきた人同士の連帯感があった。精神的ストレスの少ない心の和む場所であると考えられる。一方、在日コリアン高齢者の高齢化が進行して在日コリアン高齢者の数は減りつつあり、事業所は共通して利用者の確保が課題であった。それで、複数の事業所はサービス提供日の縮小、在日コリアン高齢者だけでなく日本人を含め多様な国籍の高齢者を対象とするサービスの提供など対策案を検討していた。

<在日コリアン向けのボランティア団体>

2000年以降日本に留学して社会福祉の勉強をして日本の福祉・医療分野に携わっている在日コリアンが集まって開いた「在日韓国人高齢者の老後を考える勉強会」からスタートし、新型コロナウイルス感染症が広がっていた時に居場所のない在日コリアン高齢者が定期的に集まり、一緒に食事をして交流する活動を訪問介護事業所の一角を借りて始めた。最初週2回の活動が感染症や財政などの運営難で週1回の活動になった。参加している高齢者は、主に1980年前後に単身で来日したニューカマーの在日コリアン高齢者であった。日本語の読み書きはもちろん会話も難しい人が多く、参加するボランティアもほとんど在日コリアンであるため、参加者間の会話には韓国語が用いられた。韓国の年齢を重んじる文化が守られ、高齢者間では年上の人をヒョンニム（お兄さん）と呼び、子世代にあたるボランティアは高齢者をオモニ（お母さん）・アボジ（お父さん）と呼んでいた。高齢者のなかには介護認定を受けた人もいれば自立して生活を営んでいる人もいて、比較的自立している人は、ボランティアと一緒に食事の準備や調理をしたり自宅で調理した韓国バンチャン（おかず）を持参したりして参加し、皆と分け合った。高齢者からは、母国で味わった母の味と同じであると涙ぐむ人がいて、この団体の活動に参加することが生きがいとなっているとの発言があった。他の活動は、ボランティアの進行で、日本語学習の機会がなかった高齢者のための日本語学習、創作活動、韓国の番組と同じテーマの活動や韓国歌のカラオケ、健康体操、薬局や消防署など地域の社会資源との連携による情報提供や遺影の撮影など多様であった。言語のバリアにより情報入手が困難であり、地域社会との交流がなく一人で孤立気味である在日コリアン高齢者の生活に役立つ内容で組まれていた。このような居場所提供の他に、受診時の付き添い、行政書類の翻訳や作成、日常生活に有効な情報提供や介護保険などの相談を行っていた。この団体の活動に参加して知り合った参加者は、集いがない日にも会って互いが知っている情報を共有したり安否を確認したりと助け合っていた。一方、ボランティア団体として活動を継続するためには、ボランティア・資金・場所の確保が課題であった。

コミュニティ活動の参加者へのインタビュー調査

デイサービスを利用している在日コリアン高齢者は日中一人で家にいるよりデイサービスに行くことで、人と話ができ楽しいので、利用していると述べられた。また、日本のデイサービスに行ったことがある在日コリアン高齢者は、片言の日本語で話をする人がすぐ日本人でないと分かってしまう、余暇活動は馴染んでないことが多くてついていけないため、在日コリアンの職員がいて同胞の高齢者が通っているところが気を張らずにいられると述べられた。これらにより、在日コリアン高齢者は同胞の支援者がいる施設や団体を利用することで、外に出かける機会となる、同胞と母国語で話ができる、母国の料理が食べられる、日本人がいないので気を張らずにいられる、異国で同じ経験と思いをした人同士で共感できる、韓国の歌や遊びができる、子どもが安心する、生きがいとなることが示唆された。

在日コリアン高齢者支援におけるエスニック・コミュニティの有効性

本研究調査の協力が得られたデイサービス事業所とボランティア団体は、在日コリアンが自分の親世代の在日コリアン高齢者を支えるために立ちあげたものである。これらのコミュニティ活動に参加する在日コリアン高齢者は、日本で長く生きっているのに言語の壁が解消できず、地域の人と交流がない、韓国に帰国できない、自宅以外に居場所がない、受診などの用事がなければ外に出ることはなく一人で家にいるしかない人々であった。それで、行き場がほしい、母国語で話したい、同胞と一緒に母国の食べ物を食べたい、お正月やお盆などの祝日には韓国伝統の祝いをしたい等のニーズをもっていることが示された。このようなニーズのある在日コリアン高齢者と共通の言語と文化を有する子世代が担い手になっているコリアンコミュニティは、異国で帰れない母国を懐かしみながら行き場のない在日コリアン高齢者の安否確認ができる、一人で孤立せず地域社会に出られる、同胞と会って母国語で話し合える、母国の習慣や文化が楽しめる、支え合える居場所であり、在日コリアン高齢者には情緒的かつ精神的に支えになっていることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安瓊伊	4. 巻 45(3)
2. 論文標題 ニューカマーの在日コリアン高齢者が抱えている生活上の困難と社会福祉サービスアクセスの阻害要因の検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 老年社会科学	6. 最初と最後の頁 200-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安瓊伊	4. 巻 22(13)
2. 論文標題 在日外国人高齢者の生活課題とコミュニティによる支援の在り方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 安瓊伊
2. 発表標題 在日コリアン高齢者を支援する専門職がとらえた支援上の困難感
3. 学会等名 日本介護福祉学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安瓊伊
2. 発表標題 在日コリアン高齢者が抱えている生活上の困難と社会福祉サービスアクセスの阻害要因に関する研究
3. 学会等名 日本介護福祉学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 安瓊伊
2. 発表標題 東京都A区の在日コリアン高齢者の生活困難課題に関する研究
3. 学会等名 日本老年社会科学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------